

## 人生は一度きり—NYC 珍道記—

清水 泰生

2月の東京マラソン2017でNYCマラソン参加資格権を取った。ボストンも走るし…。予算が…。でも「人生は一度きり」だから、やれるとき、走れるときに走っておいたほうがいいと思いNYCマラソンにエントリーした。「NYCマラソンが人生を変える」というようなメールの宣伝文句に、そんなに言うならNYC出て走ってやろうと…。

時は2018年10月31日。京都の大学で授業をしていたん家に帰って荷物を取りに行き関西空港へ。いよいよNYCへ行く。アジアナ航空の20時台の便で、仁川へ。仁川で仮眠ができるソファを発見、そこで睡眠。かなり睡眠がとれた。そして翌朝。メールをチェック。なんと11月3日の出席予定の国際会議がキャンセル。晴天の霹靂。唾然としたが仕方がない。気を取り直して11時台仁川発のNYC行きの便でNYCへ。現地時間11月1日11時ごろジョン・ケネディー空港に着いた。前回のボストン行ったとき、この空港で入国審査が2時間もかかった。しかし、今回は入国審査が40分ほどだったので、あっけにとられた。時間があつたので、ナンバーカードを取りにマラソンエキスポへ行った。マラソンエキスポは、今年4月にボストン行った時、ボストン行きのバス停の反対側の建物である。「あの時からもう半年たったのか」と思った。建物の中はHPの動画出ていた通りおしゃれなエキスポだった。ナンバーカードを取ってすぐコロンビア大学へ向かう。図書館に行き、日本の文献を扱う図書館の職員と話し、そのあと日本語教育の先生の研究室へ。会う予定していたY先生が授業で、同僚の先生と話をした。その先生と話をしているところへY先生が戻ってきて三人で談笑。コロンビア大学訪問のあと、ゲストハウスへ、ゲストハウスに着いてから30分ほど走り、その日は終わった。その日は、思っていたよりも暖かった。

次の日11月2日11時までゲストハウスにいて11時にそのゲストハウスを出て、歩いて今日泊まる場所(別のゲストハウス)へ行った。天気は曇り。「夕方のNYCマラソン開会式は天気、大丈夫かな」と思った。ゲストハウスに到着してチェックインのあと、念のため雨具を着て、セントラルパークまで50分ほど歩いた。50分はアツという間であった。16時半が開会式の受付であるが、15時前に着いてしまった。セントラルパークのゴール付近をうろうろしていたとき、NYRR共同代表のPeter Ciacciaさん(NYCマラソンディレクター)らが私の近くにいるのに気が付いた。台湾のユニバーシアードの時のFISUの会長との写真をうっかり消去してしまつたので、「今度こそはへまをしない」と思い、NYRR共同代表のPeter Ciacciaさんに声をかけて写真を一緒に撮り、そしてすぐそれを保存した。Peter Ciacciaさんは、非常に気さくな方で、「やはりこの人の人柄なしでは「すべてを受け入れるNYCマラソン」は大きくならなかつた」と思った。

そして、そのあと役員らしい人が50人ほど目に入った。その中には東京マラソンの着た若い女性もいた。その女性に声を掛けたら、やはり東京マラソン関係者で、視察に

来ていたようだった。

そうこうしているうちに、開会式の門が空き、しばらくすると浴衣を着た女性に出会う。彼女はNYに住んでいて、毎年開会式に参加しているようだった。彼女の話によるとあとからNYC在住の和太鼓グループが来るそうで、昨年のNYCマラソン日本のパレードの写真の謎が解けた。NYCに行く前、昨年の開会式の写真を見て「はっぴ、太鼓、笛など、日本からどうやって持ってきたのだろうか」と思っていたが納得。現地在住の人がそれらを持ってきたものだった。そして、その人たちは、毎年開会式のパレードに参加しているようだった。

そうしているうちにマラソン参加の女性を発見。彼女はシカゴ在住、同志社大学出身で初マラソンであった。そうしているうちに旗手の男性と東京から来た男の人がやってきた。そして黒いジャージの軍団発見。ニューバランスジャパンの一行であった。プラカードは、その国の人が持っていていと言われたので、プラカードを私が持った。

いよいよ開会式が始まった。アルファベット順に行進し、ジャマイカが終わりいよいよ日本。私がプラカードを持って先頭に立とうとしたら、和太鼓のおばさんたちが「先頭に立つ」と言って、和太鼓の人たちが先頭に。それについて行った。私の横にいた旗手が日の丸を振り回して、私は、三回くらい日の丸で頭を殴られた。「日の丸に殴られる。うう、痛い」(笑)。セントラルパークを日本の文化を代表して、しかも「JAPAN」のプラカードを持って行進できるなんて…。夢心地であった。

日本の行進の後、いろいろな国の行進が続き、そして最後、アメリカと自由の女神の登場。最高のボルテージに。そして、NYRR 共同代表の Peter Ciaccia さんが、鐘を鳴らす様子がスクリーンに出て、そしてすぐ、セントラルパークに打ち上げ花火の連発。花火と音楽が10分ほど続く。花火に向かってプラカード、旗、参加者が移動。各国の参加者が踊って、ファイナーレのシナトラの曲「NEW YORK NEW YORK」。開会式が終わり、一生忘れられない思い出は終わった。

次の日、11月5日、国際会議がなくなったので5キロのレース観戦、そのあと7番のタイムスクエアールに行き歩いて行った。そのあとゲストハウスに戻り、レースの準備をしていよいよ明日は、ニューヨークマラソン。

そして、11月6日いよいよNYCマラソン。NYCマラソンのスタート前に埼玉の日本人の女性のランナーと談笑。その女性とともにスタート地点へ、そして、大砲の音でスタート、スタート地点のヴェラザノ＝ナローズ・ブリッジ、風がきつい。しかし、雲一つない快晴。橋を渡って、ブリクリンに入ったとき猛烈な声援を受けた。「これが噂のNYCマラソンの応援なんだ」と思った。ブルックリンを北上、応援が様々で、思い思いマラソンの応援を楽しんでいるようだった。「走っている動きがちよっとゆっくりだなあ」と思ったら、目の前が、かなり急な下り。「これが噂のNYCマラソンのアップダウンだな」と思った。15キロ、20キロと通過。「いよいよ、苦しいと言われるクイーンズボロ・ブリッジだな」と思って心の準備をした。しかし実際はそうでもなかった。ただ、橋を走っているとき歓声が途絶え沈黙。クイーンズボロ・ブリッジを渡ってマンハッタンに入ると歓声で地鳴りしていた。これが噂の地鳴りか。「百聞は一見に如かず」、まさにその言葉どおりであった。大歓声の中。北上4つ目の橋をわたりブロンクスへ、残りの距離と足が持つかどうかを計算する。「35キロ以降、足が止まるかもしれないが、その時もがいてでも足を

前に出そう、歩いたらレースはそこで終わりだ」と言い聞かせた。疲れが目に見えた時に目の目に日の丸が...。「がんばれ」の声援。日の丸がずっしりと重く心に響いた。そして開会式の和太鼓グループが太鼓を力強くたたき、止まりそうな足に力水を与えてくれたような気がした。いよいよセントラルパーク。しかし、まだまだゴールまで5キロある。何とか足を動かし必死の形相。死力を尽くすとはこのことだと思った。あと一マイル。何とか3時間40分は切りたい。ラスト200mは渾身のスパート。よし切れる。ゴール。何とか目標の3時間30分台でゴール。メダル、ドリンクをもらってポンチョは...と思ったがまだもらえない。寒い。20分後、やっとポンチョがもらえ、セントラルパークを出て駅に向かう。しかし、もうろうとしていたのでなかなか地下鉄の駅にたどり着けない。30分くらいしてやっとたどり着いたがどこの駅かわからない。1号線で北に向かおうとした。地下鉄に乗ったときに見知らぬ人から「おめでとう、よくやった」という声、握手をしてきた人もいた。胸が熱くなった。NYC市民がこのマラソンに、ランナーに敬意を払っている。9.11とハリケーンなど悲しい出来事があった。その時NYCマラソンがNYC市民の心のよりどころだったと聞いていた。だから、「このマラソン、そしてランナーに敬意を払っているのだな」と思った。やっと、ゲストハウスについて。長い、人生の思い出になる一日が終わった。

次の日(7日)雨であった。プリンストン大学に訪問するのだが、プリンストン大学のM先生と待ち合わせの時間よりも一つ早い列車でプリンストンに向かった。プリンストンジャンクション到着、列車に乗り換えようとしたが、その路線が不通。それで、代替えバスに乗り換え、プリンストン駅に到着。いつもより早く着いて待っていたが、M先生がいつまでたっても来ない。まさか、別の駅で待っているのでは...。どうもM先生がプリンストン駅でなくてプリンストンジャンクション駅に1時間以上も待っていることがわかり、慌ててプリンストンジャンクション駅に戻ろうとした。携帯を持っていないのでM先生と連絡ができず、PCでS先生にメッセージで連絡を取った。S先生がM先生に連絡をとると、M先生はもう研究室に戻られていたようだった。また代替えバスでプリンストン駅に向かおうとしたが、乗るバスを間違えてプリンストンメディカルセンターへ行ってしまった。S先生に連絡を取ろうとしたがPCの電源が切れ連絡できず、周りの人にプリンストンジャンクション駅の行き方を聞きまくった。やっとプリンストンジャンクション駅に戻り、プリンストン駅へ。やっと到着。とにかくS先生の所属の日本語棟に行かなければならないと思い、向かおうとしたがなかなか見つからない。ちょうどその時日本語関係の院生に出会い、案内してもらい、S先生に会った。そして、S先生と一緒にM先生の研究室へ。4時間も遅れての面会であった。30分ほどお話をした後S先生の主催のお食事会へ。プリンストンの学生、院生とともに楽しいひと時を過ごした。プリンストン駅からバスに乗ってプリンストンジャンクション駅へ。そのあと列車と地下鉄と乗り継ぎゲストハウスへ。大変な一日は終わった。

次の日(8日)ゲストハウスを出て空港へ。そしての13時便で日本に帰国した。

今回はアクシデントがあって大変だったがNYCのスケールの大きさ、NYCの大きさを十分堪能した。百聞は一見に如かず。ランナーである人にぜひこのマラソンすすめてみたい。「NYCマラソンが人生を変える」という宣伝文句は正しかった。その人の今後の人生がきっと変わるかと思う。

ゴール前のセントラルパークでの死闘



開会式日本行進



開会式、セントラルパーク



NYRR 共同代表の Peter Ciaccia さんと



